

たたく行為の日英語表現比較

嶋 村 誠

はじめに

人や物が何かにぶつかることを我々はどのようなことばで表現しているであろうか。その表現のしかたに英語と日本語のあいだでどのような共通点や相違点がみられるであろうか。

認知言語学では、ひとの精神作用としてのものの捉え方が、ことばによる表現のしかたにも反映されると考えられている。従って、ひとつの事象についてある発話者が別の発話者と異なった捉え方をしているならば、その事象についての表現のしかたもそれに応じて異なるはずである。また、捉え方が似ているならば、表現のしかたも似たものになっているはずである。そこで、英語と日本語の表現の間にみられる共通点や相違点を観察することによって、それらの言語の母語話者に精神作用の一部として備わっているはずのものの捉え方についての共通点や相違点が浮き彫りになることが期待できる。

本稿では、人や物が何かにぶつかることをことばによってどのように表現しているかということについて、英語を調査対象言語として観察する。その過程で、日本語母語話者にとって意外感を覚えやすい英語表現には特に注意し、それを手懸かりにしながら英語と日本語の相違点、ひいては、英語母語話者と日本語母語話者のものの捉え方の相違点の一端を探りたい。

I 「ぶつかる」という事象における参与者

何かが何かにぶつかるためには、その事象に参加しているものが2つ（あるいはそれ以上）存在しているはずである。仮にいま、AとBという2つのものがぶつかった場合を考えてみると、AとBがぶつかったという1つの事象であっても、AがBにぶつかったとみるか、BがAにぶつかったとみるか、あるいは、AとBが相互にぶつかったとみるかによって、捉え方の可能性が3通りあるはずである。

しかも、「ぶつかる」ためには、少なくとも参与者のひとつが他の参与者のところまで移動して行って接触または衝突しているはずである。興味深いことは、ぶつかりの表現のなかで、第一に、AまたはBのどちらが動いたのかということと、第二に、AがBに当たったとみるか、BがAに当たったとみるか、AとBが相互に当たったとみるかということ、この2つの組み合わせが、言語間で共通しているわけではなさそうだということである。

また、動詞が目的語を取る場合には、その動詞によって何らかの変化（影響）が目的語に与えられると発話者が捉えていることを示しているのので、何が動詞の目的語に選ばれているかということを見れば、発話者がその事象をどのように捉えているかということを伺い知ることができるはずである。

本稿では、「ぶつかる」事象について言語化するときに、英語他動詞を使って何がどのように表現されているかという点に的を絞って例文を観察し、日英語、さらには日英語母語話者にみられる共通点、相違点の一端を明らかにしたい。

II 有意志性の高い表現

1 動かないものが目的語

まず、(1)-(4)の例文を観察してみよう。

(1) He began to hit the table with his hand. (BNC, FSL)¹⁾

- (2) You shouldn't hit children on the head. (BNC, A0D)
- (3) Upright cleaners have a motorised head which beats the carpet to loosen the dirt, while the brushes remove fluff and animal hair.
- (4) Also yesterday morning a man was killed when his car struck a telephone poll on the Shore Road, Greenisland. (BNC, HJ3)

これらの例文の下線部は、いずれも有意志性 (volitionality) が高いと思われる動作を描写した表現である²⁾。また、ぶつかるという事象が生起するためには少なくとも2つの参加者が関わっているはずで、かつ、その少なくとも一方が動いて他方の参加者と接触または衝突しているはずであるが、ぶつかる事象に参加しているもののなかで何が動詞の目的語に選ばれているかという観点から見ると、いずれの例文においても動いていないものの方が選ばれている。従って、これらの表現が用いられている場合、それぞれの事象は動いていない方の参加者に何らかの変化をもたらそうとする動作である、と発話者が捉えていることになる。

例えば(1)では、「彼はテーブルを手で叩き始めた」というのであるから、じっとしている the table に his hand が振り下ろされてぶつかり始めたわけである。これら2つの参加者の中で、動かない the table の方が動詞 hit の目的語になっていることからみて、He が the table に何らかの変化 (例えば、音を出すとか、震えるとか) を与えようとし始めた、と発話者が捉えていることを示している。発話者のなかでは his hand よりも the table のほうに関心の中心があって焦点が当てられており、強くプロファイルされていると考えられる。

同様に、(2)では、hit という行為の参加者の中から、You に属する動いているもの (例えば、手など) の方ではなく、動いていない参加者である children の方が選ばれて動詞 hit の目的語になっている³⁾。従って、hit という行

1) BNC では出典が3文字の略号で示されており、FSLはそのうちの1つ。以下同様。

2) 例文中の下線は本稿の筆者による。

為が、たたく動作をする者の手などに対して変化を与えるというのではなく、子供に何らかの変化を与えるものであるという捉え方が発話者によってなされていることが示されている。

また、(3)では、動いている a motorised head でなくじっとしている方の the carpet が動詞 beats の目的語になっており、発話者は、参与者の中でカーペット側に何らかの変化をもたらす行為であると捉えていることが示唆されている。また、(4)では、動いている his car ではなく、動いていない a telephone poll が動詞 struck の目的語として選ばれており、発話者は、参与者の中で電柱側に何らかの変化をもたらす事象として捉えていることが示されている。

この(1)-(4)のタイプのぶつかり表現に対応する日本語表現は何かと考えるてみよう。これらの中で、(1)-(3)の場合には「手でテーブルをたたく」「子供をぶつ」「カーペットをたたく」などヲ格が用いられ、(4)の場合には「電柱にぶつかる (衝突する、激突する)」などニ格が用いられるという差はあるものの、何を動詞の目的語として選択するかということについては、日英語とも共通している。それゆえ、日本語母語話者にとって、(1)-(4)の英語表現は意外な感じがしないものと思われる。

2 動くものが目的語 (その1)

前節では、ぶつかることを意味する有意志性の高い動詞に関わりをもつ2つの参与者の中で、じっとして動かないものの方が動詞の目的語に選ばれているタイプの例文を観察した。この節では、同じく有意志性の高い動詞の2つの参与者の中で、動くもの (例えば、振り下ろされるもの) の方が動詞の目的語として選ばれているタイプの例文について観察してみよう⁴⁾。

3) 実際には、children も動いている可能性があるが、表現としては動いていることが前提となっていない。

4) この種の動詞用法について、瀬戸 (2007, p. 466, p. 934 など) では、メトニミー (図地反転) による中心義からの意義展開パターンとして説明されている。図地反転については、Langacker (1987, 1988), Talmy (1978, 2000) が参考になる。

(5) ALVY: Hitting his hand on the counter (Allen 1997, p. 18)

例文(5)は映画のシナリオの一部で、Alvyが映画館の入り口のカウンターで行ったしぐさの説明をしているト書きである。Alvyは、個人的な主義として、映画は一番最初の部分から観始めて最後まで観ることにしているのがあるが、この時、映画館の入り口でチケット係りの人物に尋ねたところすでに2分前に上映が開始されたことを告げられる。そこで、手でカウンターをたたきながら「これじゃダメだ、入るのはよす」と言ってその場を離れる場面である。

動詞 hit の目的語としては、参与者の中でも動いた方の his hand が選ばれており、じっとして動かなかった方の参与者である the counter は場所を示す副詞表現のかたちをとるにとどまっている。このように、前節でみたタイプの動詞とは目的語の選び方が大きく異なっている。すでに述べたように、表現が異なっているのは発話者による事態に対する捉え方が異なっているからであると考えられる。

では、his handの方が目的語に選ばれている理由を考えてみよう。このコンテキストからみて、Alvyの動作の目的はカウンターをたたくこと自体にあるのではなく（もしそうであれば、“Hitting the counter with his hand”と表現する方が適切であろう）、自分の手を使って何かをたたくことに意味があると考えられ、このシナリオの書き手はそのようにAlvyの動作を捉えたはずである。そうであるからこそ動詞 hit の目的語に、じっと動かないカウンターでなく、振り下ろされた方の参与者である his hand が選ばれていると考えられる。では、自分の手を使って何かをたたく動機は何かということを考えてみると、Alvyの場合には、自分の苛立ちの気持ちを表に出すことにあり、発話者にとってそのことをことばで表現するということが動機となってこのタイプの構文が選ばれていると考えられよう。

次に、例文(6)を観察してみよう。

- (6) It was three o'clock the following morning when Tilly Mulliver was woken from a shallow sleep. Voices resounded through the house, voices raised in anger. At first she did not recognise the man's. "You're a slut! God almighty ... all these years, and I've been blind to what's been going on right under my nose."

There was a pause, then a loud bang as though someone had thumped their fist on a table or sent an object flying against the wall. "I want you out of this house! You and that useless son of yours." (BNC, FPK)

例文(6)の2番目の下線部付近には、誰かが握り拳を振り下ろしてテーブルを強くごつんとたたいたときのような音がしたということが記されている。例文(5)と(6)には異なる動詞が用いられているが、目的語の選び方には共通点がみられる。すなわち、動詞 thump の目的語としては、(5)と同様に、参与者の中でも動いた方の their fist が選ばれており、じっと動かなかった方の参与者である a table は、これも(5)と同様に、場所を示す副詞表現のかたちをとるとどまっている。このように例文(6)も、前節でみたタイプの動詞とは目的語の選び方が異なっている。すでに述べたように、表現が異なっているのは、発話者の捉え方が異なっているからであると考えられる。

では、ぶつかる事象を表現する場合に、動かない方の参与者であるテーブルを目的語とした場合と何が異なっているのであろうか。この例文の場合も、テーブルをたたくという側面よりも、握り拳で何かをたたくという側面が前景化されており、そのことが目的語の選択に現れていると考えられる。

では、なぜその側面が前景化されているのかということを考えてみると、この行為の動機が、テーブルをたたいてテーブルに何らかの変化をもたらすということではなく、握り拳で何かをたたくこと自体にその意味があるのであって、その目的は怒りを表に現すことにあると考えられる。また、そのことは最初の下線部の voices raised in anger (怒りの声が上がった) こととも符合しているし、最後の下線部にある「この家から出て行け! おまえも役員

たずの息子もな。」という怒りのことばとも符合している。

また、次の例文(7)においても、動詞の目的語として選ばれているのは、参加者の中で、じっと動かない the settle (長いす)ではなく、振り下ろされた参加者の握り拳の方である。しかも、2番目の下線部に記されているように、例文(7)も怒りを露わにしている場面について表現したものである。例文(7)と同じく動詞 beat を用いた(8)においても同様の構文が用いられており、2番目の下線部に「彼女を怒ってにらみつけた」と記されていることから伺えるように、これも怒りを露わにしている場面であり、(他のものではなく)ベッドを何かで連打することに意味があるのではなく、(他のものではなく)拳で何かを連打すること自体に意味があると考えられる。

(7) ... Aggie now beat her closed fist against the end of the settle as she added angrily, “If she had acted like the friend that she was supposed to be to the mother I wouldn’t be faced with this lot tonight.” (BNC, CK9)

(8) “... I think you are mad!”

Benedict beat his fist on the bed and glared at her. (BNC, HGV)

少なくともこれまでにみた例文(5)-(8)から、次のようなことが言えるのではなかろうか。すなわち、たたく動作について表現する場合、たたくために振り下ろす手や握り拳を動詞の目的語にする構文が用いられるのは、振り下ろした手や握り拳が対象物に何らかの変化を与えるためではなく、動作主が「苛立ち」「怒り」など激しい感情を露わにするためにそのような動作が行われていると発話者が捉えている場合ではないかと思われる。

これまでに観察した例文(5)-(8)で用いられていた動詞 hit と thump と beat 以外の類義の動詞についても、はたしてこのようなことが言えるであろうか。いくつかの動詞を通して、検証してみよう。

まず、例文(9)は、動詞 strike が用いられた例である。

- (9) “There is evil afoot. One murder can be explained, one suicide can be accounted for, but another suicide?” His fat face beamed. “Ah, no, Sir Richard may be pompous, Lady Isabella frosty, Dame Ermengilde may strike her cane on the floor in temper, but Vechey’s death cannot be dismissed. There is evil here, and you and I, Athelstan, will stay like good dogs following the trail until we sight our quarry. Come! The living may not want to talk to us but the dead await!” (BNC, H98)

この例では、振り下ろされているのが手ではなく杖であるが、やはりそれが動詞の目的語に選ばれているこの文においても、2番目の下線部に記されていることから伺えるように、かんしゃくを起こして (in temper) おり、その感情を露わにするためにこのような行為が行われたと発話者によって捉えられていると考えて差し支えあるまい。

では、動詞 smack を用いた例文(10)、動詞 pound を用いた例文(11)、動詞 bang を用いた例文(12)の場合はどうであろうか。

- (10) His arrogance made her even more determined than before. She tightened her lips into a straight line. “You’ll be released when I decide.”

Taczek hoisted his fist and smacked it down on the table with a hollow bang. “This is outrageous. I demand my solicitor. You just don’t know what you’re letting yourself in for, meddling with me.” His cheeks were the colour of dough and his eyes sparkled with anger. (BNC, G15)

- (11) “... What sort of work were these girls doing for us?”

“Women are a damned nuisance and I could do without hiring a single female. Their job is at home, in bed and then doing the cooking. But sometimes because they are female they’re more suitable for interviewing men susceptible to so-called feminine charm.”

“You mean they were call girls?” Adam enquired.

“Hell, no!” Hauser pounded his huge fist on the desk and glared. “They were secretarial types—like Peggy. Adam, you’ve got what you need. Catch the earliest flight down to London, check up on the Lennox twist. OK?” (BNC, CN3)

- (12) In his anger and frustration, he picked up a long, curved clothes brush and banged it down hard on the surface of the table. (BNC, ANY)

いずれもこれまでに観察した例文(5)-(9)と同様に振り下ろされるものが動詞の目的語に選ばれており、予想通り、(10)の下線部 smacked it down on the table は、2番目の下線部「目が怒りに輝いていた」が示すように「怒り」の感情を露わにするためであると考えられる。また、(11)の下線部 pounded his huge fist on the desk は、その直後の下線部 glared (怒ってにらみつけた) から分かる通り、同じく「怒り」の感情を露わにするためであると考えられる。さらに、(12)の場合には、最初の下線部から分かる通り、「怒りとフラストレーション」から下線部のように衣装ブラシをテーブルの表面にたたきつけた (banged it down hard on the surface of the table) と考えられる。

では、この構文が選ばれるのは、これまで観察した例文(5)-(12)にみられた「苛立ち」「怒り」「フラストレーション」の感情を露わにする場合に限られるのであろうか。そのような観点から実例にあたって調べたところ、次のような例文が得られた。

- (13) Keith saw most of the leadership slain. Four earls, no five—Ross, Lennox, Strathearn, Sutherland and Carrick—fell. But still greater losses were Sir Simon Fraser, Sir Alexander Lindsay, Sir John the Graham and the two uncles of the Steward, Sir James and Sir John Stewart. He himself, wounded, had been led off that bloody hill by his own esquire. “Dupplin Muir again!” Ramsay exclaimed, beating fist on table. “Oh, the folly of it! The purblind folly of men who would never learn! Bruce and Wallace taught their fathers

how to fight the English might. And the sons throw all away in prideful stupidity!” (BNC, CD8)

(14) Jim, seated, or perched on his chair, could not settle, but got up and stumbled about, laughing helplessly, or sat and laid his head on the table and laughed, sounding as if he wept, then in an excess of happiness and gratitude, banged his two fists on either side of his head, which banging turned into a little sharp jubilant rhythm. (BNC, EV1)

(15) She cried out in fear, and beat her hands against Johnny’s arms. (BNC, G1S)

(16) He struck his fist on the table.

“I will do it!” he said.

“At once. Tonight,” said Owen.

Osman nodded. “At once,” he agreed. (BNC, HTX)

(17) I’m hitting my head repeatedly against something that isn’t there and I suppose that that could be a definition of insanity. (BNC, CA3)

例文(13)は、味方が大きな痛手を受けて、「残念」がってテーブルを連打しているときの様子である。(14)は、「歓喜」と「感謝」のあまり両手の握り拳で頭の側面をたたいているときの様子である。(15)は、女性が「恐怖」から男性の腕を手でたたいているときの様子である。また、(16)は、「よし、やろう」と強い「決意」を示して拳でテーブルをたたいているときの様子である。最後の(17)は、2番目の下線部が示唆する通り、「精神障害」のために、自分の頭を有りもしないものに何度もぶつけているときの様子を描いたものである。

このように、振り下ろされるものが動詞の目的語として選ばれている構文は、「苛立ち」「怒り」「フラストレーション」だけでなく、「残念」「歓喜」「感謝」「恐怖」「決意」「精神障害」など、ある種の強い感情を露わにするために用いられると考えて差し支えあるまい。

そこで、これまでにみた例文(5)-(17)に共通している点をまとめておくと、①何か(手や握り拳など)を振り下ろして何か(机など)をたたく動作をしていること、②これらの行為は、手や拳などを振り下ろして何かをたたくこと自体に意味があると考えられること、③動詞の目的語として、(手や拳など)振り下ろされる方の参加者が選ばれていること、また、④その行為の動機は(「苛立ち」「怒り」「フラストレーション」「残念」「歓喜」「感謝」「恐怖」「決意」「精神障害」など)心に抱いている激しい感情を露わにすることにある、ということである。

この節で観察してきた英語の構文が、日本語母語話者には意外感をもって受け取られ、他方、Ⅱ-1節で観察した英語の構文は、日本語母語話者にも意外感を抱かれぬのはなぜであろうか⁵⁾。考察のヒントとするために、Ⅱ-1節のタイプとⅡ-2節のタイプの英語表現に対応した日本語表現を挙げてみよう。

(18) Ⅱ-1節のタイプ (英語)

- a. hit the table with his hand
- b. beat the carpet

(19) Ⅱ-2節のタイプ (英語)

- a. hit his hand on the counter
- b. beat his fist on the bed

(20) Ⅱ-1節のタイプ (日本語)

- a. 手でテーブルをたたく
- b. カーペットをたたく

(21) Ⅱ-2節のタイプ (日本語)

- a. 手をカウンターにたたきつける

5) このタイプの英語動詞の目的語に対して意外感をもたれることは、巻下(1984, pp. 20-22)にも指摘がある。

- a'. 手をカウンターに振り下ろす
- a''. *手をカウンターでたたく
- b. 拳をベッドに打ちつける
- b'. *拳をベッドにたたく

英語では、hit や beat など、同じ動詞がⅡ-1 節のタイプとしてもⅡ-2 節のタイプとしても使える。他方、日本語では、Ⅱ-1 節のタイプが主流であり、Ⅱ-2 節のタイプのように動くものを目的語に選んで表現するには、Ⅱ-1 節のタイプの動詞ではなく、複合動詞が用いられる。つまり、Ⅱ-1 節のタイプとⅡ-2 節のタイプの動詞には別々の表現が用いられる。したがって日本語では、動くものを目的語にとる有意志性の高い動詞はⅡ-1 節のタイプに用いられるだけであり、日本語母語話者にとって、そのような表現方法と捉え方の組み合わせが自然なものと感じられるようになってきていると思われる。そのため、日本語母語話者にとっては、英語において、Ⅱ-1 節のタイプに使える動詞が、Ⅱ-2 節のタイプの動詞としても使えることに意外感を覚えるものと考えられる。

3 動くものが目的語（その2）

前節では、たたくという意味の動詞の目的語として、参加者のなかで、手や拳など振り下ろされるものが選ばれている構文を観察した。そのとき観察した例文では、振り下ろされる手や拳に打たれる動かない方の参加者に何らかの変化を与える動作として捉えられているのではなく、もっぱら心に抱いている激しい感情の発露を示す動作であると発話者が捉えていることが観察された。

しかしさらに広く言語資料を観察すると、手や拳など振り下ろされるものが選ばれている構文には、もっぱら激しい感情の発露を示している表現というよりは、気持ちをこめて一生懸命その動作を行っている様を描写しているという程度のものもある。例文をみてみよう。

- (22) There was a broken branch half-buried in the bed of leaves around the base of the tree under which he stood. He pulled it free. It was about a metre long and as thick as his wrist. When he struck it hard against the trunk of the tree it seemed solid and did not break or splinter. Thoughtfully, Rostov laid it to one side. He was not sure that he would need a weapon, but there was no harm in being prepared. (BNC, FSE)

例文(22)において、動詞 hit の目的語に選ばれているのは、振り下ろされる方の参与者である木の枝を指す it であって、それが振り下ろされてぶつかる相手の the trunk of the tree (木の幹) の方ではない。したがって、目的語の選び方は前節の各例の場合と同じであるが、(22)は激しい感情の発露を表現しているものとは考えにくく、2番目と3番目の下線部から分かります。木の枝が武器として使い物になるかどうかを確かめるために、その丈夫さ加減を真剣に確認しようとして一生懸命に木の幹にたたきつけている場面と考えられる。前節のような例文を、強い感情の発露のプロトタイプ的な場合であるとするならば、例文(22)のように、気を入れてこの動作を行っていることは、強い感情の発露の周辺的なものと考えられ、それが振り下ろされるほうのものを目的語にとる動機になっているものと思われる。

動詞 hit が用いられた例文(23)においても、(22)と類似のことが考えられる。これは自分の頭を木に数回ぶつけている光景であるが、必死になって行っているということは、木に血が付くまでその動作を行ったと記されていることから伺える。このように必死にこの動作を行っているとは発話者が捉えていることは、強い感情の発露の延長線上にあり、そのことがこの構文を選ぶ動機になっていると考えられる。

- (23) He howled like a wild animal, and hit his forehead several times against a tree, until the wood was covered in blood. (BNC, GWH)

動詞 pound が用いられた例文(24)においても、やはり(22)(23)と類似のことが考えられる。

- (24) At first there was no response to Cleo's knock, at which Dauntless was greatly relieved. She looked back over her shoulder at him and pulled a sour face. Then, squaring her shoulders, she lifted the knocker again and pounded it repeatedly against the door. (BNC, GW2)

これはノッカーを使ってドアをノックしている事態であって、感情の発露のみが動機とは言い難いが、ノックしても最初は応答がなかったので、熱を入れてノックしたことは、最初の下線部に記されているように「肩を張って」までノックしていることや、繰り返しノックしていることから伺える。単にノックしたというのでなく、強い感情の発露の延長線上にある、熱を入れてノックしているという捉え方が、この構文を選択させる動機となっていると考えられる。

動詞 thump が用いられている例文(25)は、ウサギが巣穴にいるところをイタチに狙われると、後ろ足で穴の床面を強く打って危険を仲間に知らせようとするのがよくあるということを説明している一節である。動詞 thump の目的語には、the tunnel floor でなく its hind foot が選ばれている。ウサギは命を狙われているわけであり、通りかかる人間の耳にも足下からその音が聞こえるほどであるから、よほど必死になってこの動作を行っているにちがいないという捉え方を発話者がしていることがこの構文の選択につながっている、と考えると差し支えあるまい。

- (25) Rabbits also betray their presence with freshly excavated soil outside their burrow, but they will still be cautious and elusive at this time. Hunting stoats, polecats and weasels are a particular threat to them. If disturbed by a predator within its burrow, a rabbit will often thump its hind foot on the

tunnel floor to warn the others of danger. You may be lucky enough to hear the sound, coming up from the very earth beneath your feet. (BNC, G33)

さらに、次の例文(26)(27)のような beat one's head against a (brick) wall (成功の見込みのないことを辛抱強く企てる) という意味の決まり文句の中においても、振り下ろされるものの方が目的語として選ばれている。これらの文においても、例えば(26)においてシロアリが懸命に動いている姿や、(27)のように限られた可能性に直面して途方に暮れながらも辛抱強く頑張っている姿を描いているわけであるから、懸命になっている姿を描くということがこの構文を用いる動機となっていると考えられよう。

(26) Soldier termites sound an alarm by beating their large hard heads on passage walls. (BNC, EFR)

(27) Where the old cinematic heroes had beaten their heads against the wall in frustration at the limited range of possibilities offered to them, the new culture celebrated limitless potential. (BNC, A7L)

このように、動くものの方が動詞の目的語として選ばれている場合に、前節でみたような、もっぱら感情の発露というプロトタイプ的な場合から、この節でみたような、少し周辺のなものが動機となっている場合に至るまで、さまざまなものが存在していると考えられる。

Ⅲ 有意志性の低い表現

1 動かないものが目的語

Ⅱでは有意志性の高い表現について観察したが、今度は有意志性の低い表現と思われるものについて考えてみる。

まず、有意志性の低い表現で動かないものが目的語に選ばれている実例を見つつけようとしたが、今のところ見つかっていないところからみて、本稿で

は、このタイプの構文は存在していないと考えておきたい。逆に言うと、動かないものを目的語にすると、II-1のように有意志性を備えているという捉え方に基づく文と同じになってしまい不都合なので、避けられているということであろうか。

2 動くものが目的語

では、ぶつかることを意味する有意志性の低い動詞の2つの参与者の中で、動くものの方が動詞の目的語として選ばれているタイプの例文について観察してみよう。

まず、例文(28)では、動詞 hit が用いられているが、転んで頭をベンチにぶつけてしまったという不可抗力によるものであり、意志性は感じられない。

(28) Adam had fallen over in the playground, hit his head on a bench, been taken to hospital. (BNC, CLD)

例文(29)では、急に起き上がったというところまでは意志性が伴っているが、その結果頭をひさしにぶつけてしまったという動作に意志性はない。

(29) He sat up quickly and hit his head on the eave. (BNC, CAB)

また、例文(30)では、空中に浮きあがった結果天井に頭をぶつけるというのであるから、やはりこれにも意志性は含まれていない。

(30) I'm sure I'm going to leave the ground and float up and hit my head on the ceiling, and all the time the voices are call "DO IT DO IT DO IT ..." (BNC, BMS)

例文(28)-(30)は動詞 hit が使われている文であったが、そのほかの動詞

についても同じことが言えるかどうか検証してみよう。次の例文(31)をみると、転んで頭を手すりにぶつけてしまったということであり、動詞に struck が使われている場合も不可抗力によるものであり、動詞 hit の場合と同じく動作主の意志性はないと考えられる。

- (31) “He lashed out just once, Dean fell and struck his head against the bannister.” (BNC, CEN)

例文(32)の動詞 banged が使われている文の場合も、走っていて足をすべらせ、その結果、足を歩道に強く打ちつけたというのであるから、やはり意志性はない。

- (32) One evening as I was nearing Farr’s entrance, I was running, tripped, with the result that I banged my head on the pavement. (BNC, B22)

例文(33)は、酔っ払いが歯磨きをしているときに歯ブラシを床に落としたので拾おうとして頭を洗面台に打ちつけてしまったのであるから、やはり意志性はない。

- (33) He began to clean his teeth, jabbing at his mouth, then dropped the toothbrush on to the floor. He picked it up, banging his head on the bowl. (BNC, A7A)

最後に、例文(34)を記しておく。

- (34) Didn’t, one of those hostages had suffered brain damage from the Oh, I don’t know. Well, cos he was thrown against the wall and hit a mole on his head or something and it caused a bruise and it has actually damaged his

brain. (BNC, KD0)

これは、人質が壁に投げつけられて脳に損傷を被ったという事態について触れられている箇所である。壁にぶつけられた際に動いた方の参与者であったのは人質の頭であったはずである。そして下線部は、壁に投げつけられた結果として生じた a mole (あざ) を、それを引き起こした動作を表す動詞 hit の目的語にしている表現である。いわば原因となる行為を表す動詞が、その行為の結果を先取りして目的語にしている表現、つまり原因と結果がひとつの動詞句内に同居したかたちの表現になっている。

以上、例文(28)-(33)を通して、ぶつかりを意味する動詞の2つの参与者の中で、動くものの方が動詞の目的語として選ばれているタイプの例文を観察した。そこから伺えることは、このタイプの構文は、有意志性が低く、ぶつかりの動作はもっぱら不可抗力によるということである。

IV まとめ

以上、人や物が何かにぶつかることをどのように英語と日本語とで表現しているかについて観察した。その結果、英語においては、振り下ろされるもの(手や握り拳など)を動詞の目的語として選んで表現しているときは、その動作主が激しい感情を発露している行為であると発話者が捉えている場合か、または、動作主に意志性が伴っていない不可抗力によるもののどちらかであることが観察された。

また、英語においては、ぶつかり動作において止まっている方の参与者が目的語として選ばれる場合と、振り下ろされるものが目的語として選ばれる場合のどちらにおいても同じ動詞を用いることができるために、それができない日本語を母語とする話者には意外感が伴うと考えられるのであろうということについても触れた。

(筆者は関西学院大学商学部准教授)

引用文献

- Allen, Woody. 1997. *Annie Hall*. Revised ed. Tokyo: Shohakusha.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1988. "A View of Linguistic Semantics." In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*, 49-90. Amsterdam: John Benjamins.
- Talmy, Leonard. 1978. "Figure and Ground in Complex Sentences." In Joseph H. Greenberg, ed., *Universals of Human Language*, Vol. 4: *Syntax*, 625-629. Stanford: Stanford University Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*, Vol. 1: *Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 卷下吉夫 1984. 『日本語から見た英語表現—英語述語の意味的考察を中心として—』 研究社出版.
- 瀬戸賢一編 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』 小学館.
- 竹林滋編者代表 2002. 『新英和大辞典』 第6版, 研究社.

コーパス

BNC 小学館コーパスネットワーク